

No. 17 ■■■ 天津での日々

社会科学教育講座 准教授 内田秀昭



2年生との最後の授業にて



News from INU

今年4月から7月中旬まで天津師範大学で授業を行ってきました。私が天津に滞在している間は1年生と2年生、そして三重大学への留学を終えて3月に中国へ帰国したばかりの4年生という3学年の学生が在籍している状況でした。

普段の授業としては、1年生と2年生の日本語口語という会話を週に2コマずつ、計4コマ担当しました。現地に赴くまでは日本語だけの説明や指示だけで授業を行い、円滑な授業展開ができるのか心配でした。しかし、到着した当日に事務所で作業をしていると早速2年生のクラス委員の学生が流暢な日本語で話しかけてきて、これならば2年生の授業は問題なく行えるのではないかとすぐに不安は消えました。1年生はというと、ほとんどの学生が日本語を勉強し始めてまだ半年しか経っていないにもかかわらず、既に授業中の指示を聞き取ることができていたので、こちらも授業に支障が出ることはありませんでした。授業は基本的に教科書に従い、まずは大きな声で発声することに注意しながら会話のフレーズを毎時間少しずつ学習しました。

また、教科書を使った授業だけでは学生の勉強へのモチベーションを維持することが難しかったので、進捗状況に応じて時間的に余裕があるときには時折学生の関心に合わせた授業も行いました。中国人学生の多くが日本のアニメに興味を持っており、これを授業に活用できないかと考えていたところ、八里台キャンパスの事務所に宮崎駿のアニメ『千と千尋の神隠し』があったので、これを1年生と2年生の会話の練習に取り入れました。初めに映画を見て、次に各学生に場面と人物を振り分けてグループごとに台詞を練習し、最後に音声を消した映像に合わせて日本語の台詞を話すというアフレコに挑戦しました。映

像のスピードに合わせて長台詞を話すのにはなかなか難しかったようで、手こずる学生もいた一方で、映画に登場する個性的なキャラクターになりきって声色まで真似する学生もいました。その他に、1年生の授業ではかるたを使いながら、日本の諺について学習しました。そこで学んだ日本の諺にはもともと中国から伝わったものも含まれており、学生は中国ではお馴染みの諺が日本語ではこのように表現するのかと興味を持っているようでした。また、読んでも意味が分からない諺でも漢字で板書すると学生は大体の意味を理解できることも多く、漢字を共有していることの重要性を改めて気づかされました。

授業で特に印象深かったのは、普段われわれが使っているしぐさに関する話をしたときでした。人を静かにさせるときに「シーッ」と言いながら人差し指を口の前で立てる動きや、狭いところで人前を通るときに片手を立てて上下に振りながら歩くという日本人のジェスチャーを紹介したときに、中国人学生にはそれが何を意味しているのかまったく理解できない様子で、彼ら彼女らの目には奇妙な動きをしているように映ったようでした。その姿を見て、言葉はもちろんこのような動きも国が変わればまったく意味が通じないのかということを感じました。

1年生、2年生の授業以外には6月に卒業した4年生の教育実習と卒業論文指導も担当しました。4年生は昨年の秋から今年の春までの約半年間、三重大学に滞在していたのに、実はその間に話をしたことがある学生はわずかに数名で、その他の学生とはなかなか接する機会はありませんでした。しかし、天津に着いてからは4月に教育実習を通じて5名の学生の指導にあたり、また、それと同時に並行で卒業論文の作成では3名の学生の主査、5名の学生の副査を担当しました。4月末の卒業論文締め切り後は5月に行われた口頭試問に向け論文の審査に入りました。学生を11名ずつ2つのグループに分け、そのうちの

一方を担当したので、これらを通じて今まで面識のなかった4年生の多くの学生とも知り合うことができました。教育実習では、指導した5名の学生が最後の研究授業で『しろくまカフェ』という日本のアニメを用いて、その一場面を日本語の台詞で再現するというアイデアを出し、非常に興味深い授業を行いました。先述した宮崎アニメのアフレコの授業は実はこれをヒントにして自分の授業にも取り入れようと考えたものです。

天津での3カ月間の授業と生活を通じて天師大の多くの方と知り合うことができたのは、自分自身のためにも良い経験であったと思っています。しかし、その一方で、卒業した2期生が昨年秋から三重大に半年間滞在していたにもかかわらず十分に交流が持てなかったことに対する反省の念も感じています。来年の春以降も毎年新しい学生が次々に三重大に留学することになるので、授業を担当した学生には、三重大に行ったらより多くの先生方や学生と交流の機会を持つように話してきました。三重大の学生についてももっと積極性に留学生と接する機

会を見つけ、国際的な視野や外国語能力などを養ってほしいと感じています。三重大の学生と天師大の学生がさらに交流の輪を広げ、互いに良い刺激を与え合うことができれば、きっと両大学ともさらに魅力ある学生が育つのではないかと思いますし、またそうなることを期待しています。

4月の初めに八里台キャンパスで東先生や天師大の先生方に出迎えていただいたときにはそれからの3カ月間を長く感じていましたが、終わってみれば本当に楽しく短い時間でした。最後に不在中ご迷惑をかけました教育学部の先生方、滞在中にお世話になった東先生、天師大の先生方に感謝申し上げます。



1年生との最後の授業にて

海外からの留学生

ショートステイ「ものづくり・知財教育研修」

内モンゴル師範大学大学院 韓永平・趙振龍・李尚芳

私たちは、松岡守教授のおかげにより、日本学生支援機構の留学生交流支援制度ショートステイに基づき2012年1月11日から4月10日まで三重大に短期留学することができました。今度の機会を与えてくれました日本および三重大に大変感謝しています。

日本に来て三重県農業研究所・三重県松阪食肉衛生検査所・勢水丸（乗船）・武豊火力発電所・碧南火力発電所・核融合科学研究所・瑞浪超深地層研究所に行って見学しました。見学を通して、日本の会社の生産状況や先進科学技術などが分かりました。生産率の向上だけではなく、自然環境の改善にも力を入れていることがさらに印象的でした。また、皆様と一緒に食事をして楽しかった。いろいろな日本料理を味わうことができうれしかったです。



「水碓」の模型

三重大教育学部附属学校の公開研究会に参加し、こうした研究活動の主な目的は教育の品質を高め、教師の能力を向上させ、問題点を意識して解決することであるとわかりました。また、神戸高校・高田高等学校・久居中学校に行って授業を見学して、日本の教育について少しかもしれませんが理解しました。



また、様々な研究会、例えば、三重大教育学部技術教育コースの卒業研究発表会・附属教育実践総合センターの学習支援研究会・moodleMootJapanの会議に参加することを通して、研究方法などいろいろな方面の知識を身に付けました。私たちのこれからの学習と研究に重要な役割を果たすと思っています。私たちはこの三か月のあいだ、ものづくりの実践も行いました。写真は私たちが制作した中国の水碓小屋「水碓」の模型です。みんなで協力し、手を動かして水碓を作ることの楽しさを実感できました。

この三か月の留学は私たちにとって非常に貴重な体験になりました。